

報告Ⅱ 中国の台湾政策

(東洋学園大学) 朱 建榮

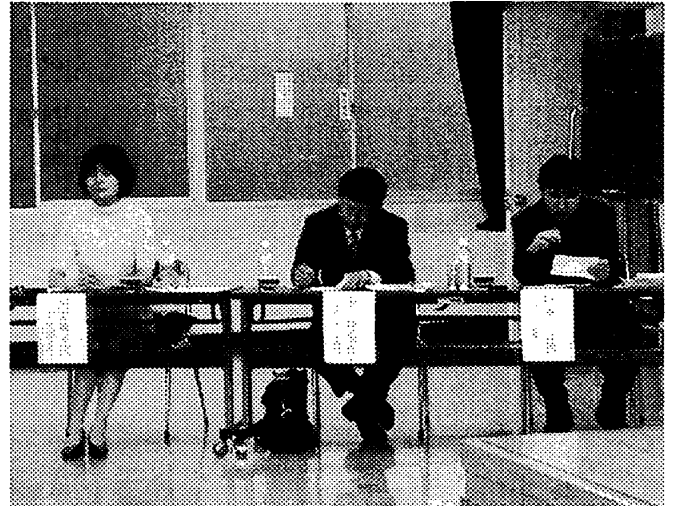
ただ今、ご紹介いただきました朱建榮と申します。きょうの公開講座の2番バッターですけれども、「中国の台湾政策」という題で発表させていただきますと思います。

こういうテーマは、本当はいろいろな側面があって、1時間ではとても話し切れないのですけれども、なるべく個々の要点として、中国の政策、次に中国人の発想、その表の発言、行動の背後にある思考様式、本音、さらにこれからの行方ということに重点を置いて、お話をしてみたいと思います。

冒頭に、中国研究所の丸山理事長が台湾情勢に関して、去年の7月9日に李登輝が言った二国論というのが、1つの焦点だったとおっしゃったんですけれども、まさにそのとおりで、その後中国は台湾対策に関して慌ただしく動き出したようです。軍事面で軍事演習を含めて、いろいろな対策もその間に打たれました。後で触れますけれども、参考資料の1で、8月1日に中央軍事委員会弁公庁が、台湾といざ戦う場合にどうなるか、というような予測の文書まで出しています。

一方、今年2月21日に「台湾白書」が発表されましたが、朱鎔基首相も明らかにしましたように、それは二国論に対する反応で作成されたということです。つい数日前まで、上海を中心に回り、そこでその背景を少し聞きましたが、去年8月の時点で、この「台湾白書」の準備が始まって、11月ごろにはほぼ全文が出来上がりましたが、それを各関係部門、特に江沢民の周辺で、たらい回しにみんな読んでいって、結局、年末までに出すつもりだったのが、2月の発表になりました。

あるエピソードとして、今回の白書は国务院の



左より、川上桃子講師、朱建榮講師、塚本元講師
台湾弁公室が中心に作成し、発表したのですが、発表の期日について外交部に知らされていなかったそうです。そのときにアメリカの国務次官タルボットも北京に行ったんですけれども、外交部から一切それについての言及がなく、中国大陆を離れた6時間後に白書が発表されたので、アメリカはメンツ丸つぶれですね。一時期猛反発しました。

いずれにしても、その間に中国側の台湾対策が、大きく揺れました。しかし台湾で9月21日に大地震がありました。その後、中国側の対応も台湾側の対応も、この地震によって、スケジュール的にどうも両方ともいろいろ変更せざるを得なかったようです。

ここでもまた1つエピソードを申し上げますけれども、4月末に、あるテレビで台湾独立運動の活動家と一緒にディベートをやったんですが、そのディベートをする前に、待合室で、この独立活動家から、彼らは実は陳水扁より李登輝にもっと期待をしていた、そして二国論の後に李登輝さんはもっと言いたいことがあって、この3月までもっといろいろ言う予定だった、彼らもそういうふ

うに期待していた、しかし残念ながら大地震によってそんなことは言えなくなった、というような話も聞いております。

その間に、中国側の今回の台湾選挙に対する予測というものも揺れました。7月9日の二国論の直後、連戦を含め、それに対して賛成するというような表明があったので、唯一それに直接賛成を表明しなかった宋楚瑜に中国側は相当期待をしていました。しかし、そのうちに宋楚瑜の当選はやはり難しいという見方も、去年の末に徐々に始まって、この1月ごろからは、むしろ連戦期待の待望論が出ていたようです。

といいますのは日本もそうですけれども、台湾に関する情報は、主に国民党のサイドから出されてきたもので、国民党は党営企業、世界で唯一、莫大な党経営の財産を持っている政党ですけれども、それを使って特に対外ピーアールが非常にうまくいったんです。それは日本に対してもそうですし、中国サイドに対しても同じだったようです。日本には現にこの選挙の直前まで、陳水扁の当選を予測するものはほとんどなかったし、去年の末、今年の初めまでは、ほとんど李登輝の見方をそのまま受け入れて伝えていたような状況がかなり続いたのではないかと思います。

2月に、私はこの選挙についての分析、台湾と中国大陆との関係について、『論座』という雑誌で書いたんですけれども、日本のマスコミにちょっとした疑問を提起しました。中国の江沢民、朱鎔基などの発言については、日本はほとんどその裏をとってみる。表の字面はこうですが、本当は違うのではないかと。クリントンの発言についても、まだその裏は実はこうだというような分析はあるのですけれども、どういうわけか、李登輝さんの発言については、まるで思想の武装解除がされたように、すべてうのみにして、この2月まで果たして、李登輝さんの発言などについて、日本で疑問を提起したものがあったのか。少なくとも

も私は読んでいません。

このような状況の中で、中国も同じです。今まで国共の対立、特に目を国民党に向けたということもあったし、連戦がこの1月2日に、選挙に向けていろいろな発言を始めたわけですが、徐々に李登輝から離れ、中国大陆との関係改善をいろいろ提案した。またやはり、国民党という与党の存在は大きいというようなこともあって、多分、観測的期待を込めた予測もあって、3月の初めまで、やはり最後には連戦が当選するだろうと、北京では圧倒的にそう見られていたようです。

しかし、ノーベル賞の受賞者、李遠哲氏が陳水扁支持に出たこと、さらにこの3月の初めに、一部の財界の人を含めて、陳水扁の支持に回った。その時点で中国は初めて、陳水扁の当選もあり得るんじゃないかという見方に変ったようです。

いろいろ聞いたんですけれども、宋楚瑜の善戦は意外だったと、日本でもそうでしたが、中国でもその得票は、せいぜい400万票までだろうという見方だったようです。実際今回は466万票を取りました。それに比べ連戦が300万票未満になったということは、ほとんど最後まで予想していなかったです。そういう意味で、陳水扁の当選と国民党の惨敗について北京は相当のショックだったということは間違いありません。

その間に、中国側は、選挙の前に「台湾白書」、さらに3月15日に朱鎔基の記者会見で、台湾に対して、いろいろな牽制を送りました。「台湾白書」の真意について、日本でもいろいろ報道がありましたように、今まで、台湾に対して武力を含めたあらゆる選択肢を放棄しないということに関して、(1)台湾が独立を宣言すること、(2)外国と軍事同盟を結ぶこと、という2条件が言われてきたのですが、今回は改めて、(3)台湾側が統一の交渉を無期限に延ばす、ということに対しても、我々は容認できないということを言っています。後で中国側の話を聞いたら、この3番目の条件も1982年

に鄧小平が、既に言った話で、特に新しいものではありません。ただこの時点で、これを新しい白書に盛り込んだのは、台湾当局を交渉の方に追い込もうとする作戦、戦術的な考慮があったというのも事実のようです。

しかし、そのタイミングは先ほども言いましたように、必ずしも綿密に計算されたものではない。日本では、ときどき中国のいろいろな政策について、裏の裏をとるということで、中国という国の外交はすごいものだという先入観に基づいて見て、詮索する場合もあるんですけれども、中国の最高指導者、毛沢東、周恩来、あるいは現在でも、大きい戦略面ですごいものは確かにあると思います。ただ、その下のレベルでは、少なくとも私自身の感想では、そう見られるほど、大したものでもないんじゃないかと思います。

この「台湾白書」に関して、特にアメリカでは一時期猛反発しました。先ほど言いましたように、主にアメリカに一切事前の前触れなくいったということへの反発だったと思うのですが、それが3月の初めになりますと、アメリカ国務省の幹部が、クリントン政権はこの白書をよく研究した末、やはり3つの点で、両側の対話を促進するものが含まれている、ということを表示しました。この白書の中では、兩岸は対等の基礎の上で対話をする、ということに対し、アメリカ側はこれは積極的な一歩であると評価しました。

第2に、これまで中国側が強調した、政治問題を巡る交渉という限定的な議題に対して、この白書は政治の議題以外に、経済、それからほかの技術的な議題も討論していい、というようなことに触れているので、アメリカ側は、これは双方の交渉にプラスになるステップだと評価しました。

第3に、この白書で、李登輝の特殊二国論を厳しく批判したんですけれども、台湾側にこれの撤回を交渉の前提としなかったということです。ですから新しい指導者になれば、そのことに触れ

なければ、新しい交渉はあり得るという含みを残したものと見たわけです。中国の文章を見るときに、ときには、このように何を言ったかとともに、何を言わなかったのかということも見る必要があるかもしれません。

そして、3月15日、朱鎔基は全人代閉幕式での記者会見で、わざわざ台湾問題について、明らかに事前に用意した発言をしました。台湾に対して武力恫喝をしたこと、すごい剣幕の表情だったと報道されていますが、私は別の見方をします。今、中国語を大学でも教えているんですが、特に最初の段階で学生に言うことが、1つあります。日本語では話をするときに顔の表情は、あまり変えなくていい。しかし中国語は顔の表情を変えて、日本人から見てやや大げさに言わないと相手にアピールすることができない。むしろ、日本的な話法は何の感情もなく話をしているのだと、それは偽りのような表情だと受けとめられてしまう恐れがあります。ですから中国語の四声を言うときに、あーとはっきり思い切って言いなさい、ということを行ったんですが、朱鎔基さんはまさにこのような中国語話法を駆使する名手の1人で、表情は非常に豊かで、いろいろなことについて表情を変えて言うのですが、また彼の顔も眉毛が、中国でもちょっと変わったものがあるので、それが外部に、「形相を変えて」恫喝をしたというふうに言われたのです。

ただ、「朱鎔基が恫喝した」というのみにする人は、果して朱鎔基の記者会見の録画、現場中継を含めて、よく見たかどうか疑問です。朱鎔基の発言は実は武力などの厳しい話は、ほとんど慎重に言葉を選んで言っています。その中で言った要点は第1に、我々は絶対台湾の独立を容認しない、どうしてか。それは我々の近代史から、この国土が分割、分裂された、そのような歴史から見ても、中国はもう二度とそのような国土、もう一度中国から離れるということは容認できない。それは国

民の総意だという歴史を言ったわけです。その話の言わんとするところは、要するに極端な一線を越えるな、中国国民全体を敵に回すな、ということです。

そしてもう1点、朱鎔基が言った話で、日本では細かくはほとんど伝えられていなかったのですが、中国人ということさえ認めれば、中国人同士だったら幾らでも譲り合える、我々は譲歩する用意がある。中国人なら中国人に譲歩しても一切構わない、ということです。ただ、4年前にミサイル発射を含めた軍事演習がほとんどのジャーナリストの脳裏にあったわけですから、そのときは当然中国はそれをするんだろう、実際その前後にそれらしき発言も北京の報道機関で出たので、朱鎔基の発言というのは、そういう目で見られたのだらうと思います。

しかし、3月5日から始まった全人代のときに、台湾、香港の記者が江沢民に対して、この選挙後に軍事的緊張があるかということ聞いたのですが、江沢民は、中国の杜甫の詩を引用して答えました。杜甫はかつて「烽火連三月」という言葉、「戦火が3月につながる」というような表現があったのですが、江沢民はわざとこの言葉を引用して、今は「烽火連三月」という時代ではないと言いました。翌日から台湾の株価が大幅に上昇したんです。ですからその間に、中国側が送ろうとしたメッセージは恐らく、絶対デッドラインの一線は越えてはいけない、李登輝の後、だれが当選しようと、先ほど塚本さんの話にもありましたように、すぐ統一、あるいは独立という両極端に行く可能性はない。とにかく現状維持してほしいと。ではどうして現状維持を中国側はとりあえず望んでいるのか、後で触れます。

ここでもやはり陳水扁が当選した場合ということも、念頭に入れてそれを言ったと思います。しかし、台湾で選挙運動中に、だれも朱鎔基の記者会見の内容を細かく見ようとしないし、また特に

連戦、国民党は、この朱鎔基の発言を利用して、陳水扁が当選したら我々はみんな戦場に行くんだということを言って、それが結局、台湾の中で連戦への反発につながってしまったという側面はあったかもしれません。

1カ月後に台湾で、今回の得票数などについての検証が行われたんですけども、朱鎔基の発言によって台湾の今回の選挙の票がどこまで動いたのか、結論は1%以下だということです。

では、陳水扁の当選ということについて、中国側ではどういうふう to 評価、分析したのか。第1に、陳水扁が勝ったというよりは、国民党がみずから負けていったという見方が、挙げられます。陳水扁の今回の得票数は、40%未満ですけども、2年前の台湾の地方選挙に比べても、実際に票数は増えていなくて、むしろ減っています。さらに1年ちょっと前の台北市長選挙でも、陳水扁は負けているわけです。そのときの得票も、実は今回以上だったのです。今回は国民党が分裂し、宋楚瑜が外に飛び出して戦ったのです。連戦、宋楚瑜の2人の票を合わせれば60%になったわけですので、そういうところを見て、まず1つは、国民党がみずから負けていったと言えそうです。

第2に、陳水扁が掲げた改革のスローガンが大衆の心をとらえるところがあって、同時に、大陸との関係において彼は常にソフトなことを演出したと。それが台湾の中で、特にトップの指導者の選挙になると、やはり大陸との戦争はほとんどの人が避けたいわけですから、陳水扁、民進党の党首が当選すれば戦争になる、というようなイメージを、今回、陳水扁がかなりやわらげることに成功したと言えそうです。

主な分析はこの2点ですが、もう1点、中国で今言われているのは、今回の選挙は、やはり台湾の内部の改革ということに、大半の選挙民の注目が行ったというようなところで、内政の改革に関して焦点が行ったわけです。陳水扁がまさに改革者

という姿で、国民党の腐敗政治に対するアンチテーゼで支持を集めたというふうに指摘もされました。

当選直後、中国側は、それまで一部の新聞や学者が展開した厳しい言論・姿勢と打って変わって、5月20日の正式な総統就任式まで陳水扁の行動、言動を見守り、静観するということになりました。外部では、少し意外に感じられたところもあったんだろうと思いますけれども、それは中国の典型的な駆け引きの方法の1つで、双方とも極端な選択はいずれも避けたいわけです。しかし選挙の前までは、とにかくこの極端は選ぶな、この一線は踏み出さな、ということを行いながら、本当に当選したら、今度はその枠の中で駆け引きしてこちらに有利なように引き込もうとするわけです。

3月選挙の後、今日まで幾つか新しい動きがありました。水面下で、あるいは表面的にも虚々実々の駆け引きがありました。

それを簡単に紹介しますと、1つは中国側の、陳水扁と一緒に戦った副総統の呂秀蓮に対する批判です。呂秀蓮が香港のマスメディアのインタビューで、中国大陆とは遠い親戚、近い隣人の関係である、と発言したことに中国側は猛反発し、それは自分の先祖をも忘れた売国奴だと、強く厳しい批判をしたわけです。その批判は、私はそこまで本当にやっていいのかと、実は疑問に思うんですが、そのねらいの1つは、呂秀蓮という人は今まで相当、台湾の中でも、民進党の中でも極端な一部ですので、そこへの本気の怒りをぶつけたと考えられます。

呂秀蓮が何をしたかという、数年前、日清戦争の下関条約の締結100周年のときに、下関で日本が台湾を中国から取ったことを感謝するという、わざわざ日本に来て述べたのです。ただ今回の中国側の猛反発に対して、呂秀蓮は、一方で反発を示し、一方で中国側がこの言葉に賛成し

ないなら、近い親戚で近い隣人だ、ということに言いかえてもいいというふうに、あまり直接対抗するという姿勢はとりませんでした。

中国側の批判のもう1つのねらいは、慣用の戦術であるものですが、片方をたたいて、もう一方への牽制とするもので、すなわち、呂秀蓮をたたいて陳水扁への警告、牽制とするという狙いがありました。

その間に陳水扁は、またやはりいろいろな動きを見せました。彼は選挙期間中に二国論というものに、中国側が賛成しないなら、自分はもう使わないと言いました。実際に今年に入って今回の選挙に出た5人の候補者は、いずれも二国論に触れなくなりました。日本では一時期、二国論は台湾の当然のコンセンサスだと言ったんですけれども、やはり台湾の本当のコンセンサスは、現状を維持し、独立の選択も中華人民共和国に編入されることも嫌だ、ということだろうと言えます。

実際に今、台湾では李登輝本人を除いて、一人も二国論には触れていません。

そしてその間に、先ほど言った呂秀蓮の発言と、中国とのやりとりに関し、陳水扁はうまく、中国大陆との関係は、兄弟、姉妹の関係だ、という表現を使いました。さらに大陸へのメッセージとして、「民進党を含め、一部の政党が野党時代に言った話と、与党になってからの対応が違うのは当然である。そのような変化をもっと見てほしい、そして時間も与えてほしい」、というようなことを言ったわけです。

さらに最近になって、「1つの中国」の中で連邦制、ただ普通の連邦制というよりは連邦という字を逆にして中国語で邦連制、緩やかな国家連合に近いようなものではあるんですけれども、1つの緩やかな中国というようなことは、非常に魅力があるというような発言もしたりしたわけです。

それに対し中国側は、4月の後半になって、今度は陳水扁にラブコールを送り始めました。4月

の後半に香港で台湾の統一についてのシンポジウムが行われたのですが、中国側の政府代表は、陳水扁の最近の善意のある言動に、我々は注目しているという話をしました。そして中国側はこの選挙期間中に、陳水扁が約束した5つのNOということのをわざわざ整理して、多分牽制の意もあるんですけども、それを評価するということもしました。

香港『明報』の報道によれば、中国側が陳水扁の積極的な姿勢と評価した点は、(1)二国論を台湾の憲法に入れないこと、(2)中華民国の国旗、国語を変えないこと、(3)独立か統一かの全民投票をしないこと、(4)台湾の独立を宣言しないこと、(5)1991年に成立された国家統一委員会と、国家統一綱領を取り消さないこと。それを評価し、さらにほかの5つ、特に当選後に表明したことを評価すると言っています、(6)台湾海峡の平和を保証するために最大限努力する、(7)李登輝が言った大陸との経済交流における「戒急用忍」(引きしめ)政策を調整する、(8)中国大陆資本の台湾への投資を開放する、(9)兩岸三通の年内実現を目指す、(10)中国大陆のWTO加盟を支持する、という話をしました。

そして数日前に中国側は、「一つの中国」は必ずしも中華人民共和国を意味しない、そして台湾との交渉はあくまでも対等の交渉である、ということを書いて柔軟姿勢を示しています。

この2～3日、陳水扁は、自分は台湾のニクソンになれるかもしれない、というような話もしています。ただ中国人同士は常にそのようないろいろな駆け引きがあるので、これですぐどうなるかということは、私は大幅にドラマチックな変化はないと思うんですけども、これからの行方を見る上で2つの時期的な焦点に注目してほしいのです。

1つは5月20日の陳水扁の総統就任式で、陳水扁は何を言うのか。また、中国側は恐らくその直後にすぐ、何か行動をとる可能性はきわめて小さく

なったので、7月末、中国の指導者が集まる北戴河会議で、これからの台湾政策が話し合われ、基本方針がもう一回決められるのではないかと思います。

5月20日の陳水扁の発言について現時点で予想すれば、恐らく「一つの中国」という中国を求める原則であり、前提であるということについて触れない、NOもYESも言わない可能性が一番あるのではないかと思います。同時に中国大陆に善意を示し、積み重ね方式でいろいろな交流を始めようということはいろいろ盛り込まれるのではないかと思います。

もう1点、ここでエピソードを紹介します。中国側は、やはりつい最近まで民進党を、完全に台湾独立を求める党というふうに見て警戒していたのですが、やはり最近のいろいろなやりとり、水面下での接触を経て、民進党がこれまで独立ということ掲げていたのは、特に台湾人意識などを強調したのは、要するにすべての政治資源を国民党に握られてきたわけですから、国民党に勝つためには台湾人意識、台湾独立ということ、大衆の支持を集める唯一の手段として使い、それしかなかったということです。実際に民進党の前主席の許信良は、今はむしろ中国との積極的な統一交渉などにも賛成する人になりましたし、前の前の主席、姚嘉文など、私も会っているんですけども、彼らもやはり双方が合意すれば、独立というような理念的なものだけで、台湾の発展、安全などを、犠牲にするということは、絶対に選ばないということを書いているわけです。

今回の選挙に5人が正式に立候補したんですけども、もう1人、結局最後に立候補できなかった人がいます。建国党という台湾の独立を主張する党から、候補者が推されたのですけども、20万人の支持者の署名が必要だということだったのですが、20万人の署名、支持者すら集められなかったのです。それに対し、新党の推す李敖という

人は50万票以上支持を集めて、立候補できました。最後に李敖は、宋楚瑜を勝たせるために李敖本人も含めてとにかく投票のときは、みんな私に投票しないで、宋楚瑜に投票しようということと呼びかけていたわけです。ここからも分かるように台湾の中で極端な独立主張はほとんど支持されない、ということです。中国側も選挙の過程と結果を見て、もっと台湾の現実への認識を深めつつあるのではないかと思います。

では、次の第2の部分に入りたいと思います。中国の基本的な立場と本音です。「一つの中国」ということを中国は強調してきているのですが、台湾との統一の方式については先ほど塚本先生が紹介したレジメの中にもありましたように、かつての武力統一方式から、1979年以降、平和統一を主張するようになりました。ただ1994年までは中華人民共和国の枠に固執して、要するに中国が中心で台湾は地方政府として、中身は一切さわらないで、台湾は軍隊を持っていい、政府を持っていいということですが、しかし北京に比べれば地方政府という扱いだったという政策が続いたのも事実です。

しかし、1995年以降、中国は明らかにこの政策も変えつつあるんです。台湾に対して対等ということもほのめかし始めました。そのようなメッセージは、外部からなかなか理解しにくい、本当に言ったのか、本当にそのような立場だったのかということを疑われるかもしれませんが、中国の台湾政策の意思表示に関して、3つの対象があるということを念頭に入れる必要があります。

中国の台湾に関するメッセージ、第1、台湾向けです。それは当然です。第2、国際社会向けです。なるべく国際社会の中で、「一つの中国」という原則を支持してもらおうと。第3に、中国の国内向けです。実はこの3つの間には幾らか矛盾があります。国内向けには、我々は常に強い立場を保っているんだということを見せなければなり

ません。国際社会向けには、「一つの中国」という原則を曲げてはならない。我々が唯一の代表者であるということを見せる必要があります。今、中国は150カ国以上、台湾は30カ国近くの外交承認国を持っているんですけども、中国は常に自分が唯一、そして唯一の代表と主張しなければ、もっと多くの国が台湾と関係を持つということもありますので、国際社会向けには、それも原則論で言わなければならない。

ただ台湾に対しては、江沢民の8項目提案の時点から、中国は既に相当柔軟化してきました。最近になって、台湾の新しい情勢を踏まえて、今、実際に「一つの中国」という原則さえ認めれば、ほかはすべて交渉可能だと。1国2制度を台湾の大半の人が受け入れられないと言っている。実は中国もその点がわからなくはありません。中国は今の時点で、1国2制度、香港と同じ扱いで台湾との統一を、実は指導者はほとんど100%考えていないと思います。

ただ、中国人同士では駆け引きがあります。駆け引きは、まず本当の値段を出しちゃいけないんです。掛け値があって、掛け値は我々は1国2制度こそ一番いい解決法だと言うんです。しかしあなたがどうしても2制度がだめなら、3制度でもいい。とにかく最後に譲れないのはただ一つ、すなわち1国です。1国であればどんな解決法もその枠内で考えられるということです。ただ、今の時点で2制度を放棄すれば、中国は明らかにいろいろな交渉でカードがなくなって、立場が弱くなるということもありますので、その使いわけ、建前と本音を見分ける必要があると思います。

そういう中で、最近2つのおもしろい文章がありました。私のレジメの後ろにつけているんですけども、一緒に見ていただこうと思います。

まず汪道涵の3月29日の内部会議での発言という資料を見ましょう。残念ながら中国語しかありません。ちょっと簡単に説明します。この発言に

ついて、今回私の調べたところ、ある参加者のこの会議でとったメモによるもので、ですから言葉遣いがとぎれとぎれということもあって、一部は間違っ書いたものもあるようですが、中心的な意味はそう違っていないと確認をとりました。

第一点、「現在一番重要なのは何なのか。それはまずいろいろな状況の把握だ」としています。つまり、4つの状況の把握です。台情——台湾の状況の把握。洋情——外国の状況の把握。僑情——海外、華僑、華人の状況の反応の把握。我情——我々、自分の状況の把握です。中国の政策決定は各方面の反応をかなり気にしていることが分かります。

その次、「中国は、どうも北方は戦うということをも主張するんですけれども、長江より南は、戦争は嫌だ」ということを言っています。

その次の段落、我々の今の綱領は「一つの中国」であり、その枠の内に最大限にいろいろな人と連合して独立に反対するということです。

更にその続きで「我々の『一つの中国』という綱領ははっきり表明しなければならない。ただ、その解釈について我々は言うことは言うんですけれども、そんなに中華人民共和国という解釈にこだわらない」と書いています。つまり1993年に汪道涵と辜振甫とのシンガポールでの会合で合意した内容について、台湾側の解釈は「一つの中国、各自にその中身を解釈する」、つまり、「一つの中国」の枠内で台湾と中国大陸のそれぞれがこの中身を解釈できることに対して、中国側は正式には、今やこういうような8文字の解釈にはなっていないと言うんです。けれども、内心は互いに、あなたがそれを言って、こっちは反対を言うんですけれども、「一つの中国」であれば、それ以下の解釈は「小異を残す。でもかまわない」というようなところで本音があるのではないかと思います。

「一つの中国」についての国際的な反応のことですが、恐らく幾つかのレベルに分けられるだろ

うと汪道涵が言っています。ロシアのプーチンは「一つの中国」を本気で認める部分が多いでしょう。一部の国は中国は強くなっているから認めている。日本とアメリカが認めるのは、恐らく偽装のもので、口先のものだけだろうというようなことを言っています。そのようなことも中国はある程度、国際的に「一つの中国」と認められるからといって、情勢認識は手放しで楽観していないということの証明です。

汪道涵発言の最後の部分をちょっと見ていただきたいんですが、これから台湾問題の解決に対し、やはり4つの力が重要だと。(1)吸引力。すなわち台湾に対する魅力です。どれぐらいの魅力、引きつける力があるか。(2)支持力、中国大陸でその政策への支持が得られるか。(3)影響力、台湾へどれぐらいの影響力があるか。(4)抑止力、台湾がいざ極端を選ぶとき、我々はどこまで防げるか、抑止できるかということです。そしてその次の行、この問題は、結局台湾との関係というよりは、我々とアメリカとの戦いだという認識もあります。

レジメに戻りますが、こういうような中に、中国側が内心、極端な選択、特に武力行使を避けたいというのは、私は本音だと思います。理由は明らかです。それはほとんどの中国の民衆もわかっているし、江沢民、朱鎔基周辺は、さらにわかっているはずだと思います。武力行使によるマイナス、(1)それによって今の中国の経済発展、開放政策が不可能になります。(2)中国の外交、外部環境が大幅に悪化します。対米、対日関係の大幅な後退になります。(3)中国の資源を台湾方面に向けると、国内のいろいろな不安、問題が誘発されかねません。(4)軍事的に台湾を本当に制圧できるかどうかわかりません。(5)1万歩譲って台湾を制圧したとしても、中国人はわかっているんですけれども、ではその次に台湾をどうするのか、占領軍にするのかどうか、そのマイナス影響も分かっています。それで今の中国で一部の学者は既にこう言

っていますけれども、本当に台湾を制圧したらその次に我々はすべて撤退し、それで台湾に1国2制度をやらせますと。そのような理想論を言っていますけれども、しかしここからもわかるように、こういう極端な選択は、実際になかなかとれないというのが実状だと思います。

ちなみに、いざ戦争になれば、当然、台湾がもっと大きな損害を受けるということ、中国人世界両方が一番のマイナスを受けることは間違いがありません。

しかし、では、まず軍事的に見て、戦争の可能性がないのか、そこは私は中国人の発想で考えれば、完全に否定することができません。特に今中国でも使われている言葉で1つ、以戦制戦「戦をもって戦をとめる」という発想があります。この発想は、どういうことかという、私は2通りの解釈ができると思います。(1)我々自身の台湾に対する抑止力を強化することによって、台湾がもっと極端な選択はできないようにすると。つまり戦争の準備、いろいろな準備を強化するということを重視すること。(2)小規模な戦争をやって、究極的な大戦争を避けるというような発想も中国にあります。例えば1958年の金門砲撃。砲撃によってこれは大戦争になるのかと、当時のアメリカのアイゼンハワー政権は非常に緊張したんですけども、中国はこれによって台湾が主張する領土の中に、我々は砲弾を撃ち込める。ですからそれは中国であって、外国じゃないと主張ができる。1996年のミサイル演習でもほかの演習はみんな台湾海峡の中央線の中国寄りのところだったんですけども、4発のミサイルは台湾一部の領空を通過して落下しました。つまりこれによって台湾は中国の一部だから、軍事演習ができるのだと。こういう論理を展開して、台湾は別の国という議論を封じ、それによって逆に本当の戦争が回避できる、との発想です。

参考資料の、もう1枚、アメリカの華字新聞、

『世界日報』に掲載された中国軍部の台湾作戰についての分析です。それは去年8月、李登輝の二国論直後に発表された機密文書です。中身を見れば、本物だろうと思うんですが、この中で、中国側は、いざ戦うということになればどうなるかということに触れています。

まず、我々は本当に戦うとすれば、将来よりは現在、戦った方がいいかもしれない。理由は、今最悪の状況が発生してもアメリカ軍が完全な準備を整えるまでに、台湾を制圧することができる。アメリカが唯一やれるのは、報復的な戦争だというような情勢の認識。

また、アメリカは確かに強い力があるけれども、それはイラクやユーゴなどの小型の軍事力を持つ国に対しては、強い威嚇力を持つんですけれども、我々と戦うとすれば戦術的な優位がないと指摘しています。我々はやはり台湾と近い。アメリカは遠いところから来ないといけない。そして、いざミサイル攻撃になると、短距離、及び中距離のミサイルの数でいえば我々は優位を占めていると。

そして次、アメリカの戦後の軍事力は、小国と戦ったことがあっても、ほかの大国との戦争の中で試したことはないという意味です。米中衝突が起きても核戦争になるということはないだろうと言っています。しかし通常戦争でアメリカが戦うとなれば、アメリカは我々の攻撃のもとで数千人あるいは数百人の死者が出れば、アメリカ国内の反戦感情は急に上昇しますので、60年代のベトナム戦争の悪夢が再び起きるというような見方があります。

この文書はまた、「我々は本当は、この戦争を長くは戦いたくないが、しかし長期戦にいろいろ備えた方がいい」と述べています。なぜなら、長期戦に当然いろいろな犠牲を払うんですけれども、アメリカはもっと支えられないと。したがって、長期戦は我々にとって有利で、極端な状況のもとで我々が勝利を求める戦略的な選択肢の1つ

であると言っています。次に、中国側は、実は台湾の軍事力をそれほど評価していない。台湾は確かに軍事装備は更新されているんですけれども、いかなる戦闘の経験もない。そして大規模な戦争のテストなど、検査を受けることもできない、というようなことを言っています。

この文章について私は2点のコメントをします。

(1)中国の見方は、一部はやはり世界の軍事情勢の変化を十分に理解していないことのあらわれがあると思います。そして、中国側のこれまでのアメリカ、日本、台湾との付き合いの経験が、どうもその中に反映されている。日本はアメリカと戦って徹底的にやられたから、今の対米認識において、アメリカのことをかなり大きく評価する、実際以上に見えるという部分もあると思うんですが、中国に言わせれば、我々は、朝鮮戦争を含めて、アメリカに負けていない。ですから中国は、特にアメリカのことを恐れていない。そのように恐れないうところに落とし穴もあると思うんですが。

逆に日本に対し、日本人から見れば、我々はこんなにちっぽけな自衛隊しかない。どうして中国は日本をこんなに警戒するのか。明らかに、日本を押しつぶそうとするのではないか。いや、そうじゃないんです。私の理解では、中国人は、かつてこの小さい日本が、半分の中国を制圧してしまった。今でもこれほど大きい軍事、産業、技術開発力を持っていること、世界第2位の軍事費を持っていることで、やはり一種の必ずしも理性的なものではないんですけれども、恐怖感がある。ところが中国は、アメリカに対してはそれほど怖くない。一方インド、台湾に対しては、言葉遣いは正しくはないかもしれませんが、ちょっとなめているような部分もあるかもしれません。インド軍は、本当は現在決して弱くはありません。台湾もそうですけれども。しかし、中国から見ればいずれも大敗させた相手ですので、心理的にそれは怖くないというような部分もある。このような認識

は中国の対応策を決める背景になるでしょう。

ただ、そのような内容を有する内部文書はあるんですけれど、どうしてアメリカでスクープされたのか。私はこれを一種のアメリカに対する牽制の作戦で、どこかでわざとリークしたという可能性もなくはないんじゃないかと思います。さっき言った「戦をもって戦を制す」という考えでいえば、本当に戦うなら、我々はアメリカとやるんだと。そのようなことをアメリカに見せようとする。この強い姿勢は逆にアメリカの軍事介入を思いとどまらせることができる、と認識されています。しかし実際に中国は、外交、経済いろいろな面を見て、戦うということを選択できないということも事実だと思います。

話が長くなってしまいましたが、次に進みたいと思います。これからの中国の台湾政策の行方を決める要素は何なのか。経済要素、やはりこれを見無視してはなりません。台湾は相当強い経済力を持っている。しかし、台湾は小さ過ぎます。また、台湾の経済、技術力をもって日本、アメリカなどの先進国と勝負することはできないので、やはり大陸との交流があって初めて、台湾の経済発展があるということは、恐らく台湾経済界の圧倒的な認識で、コンセンサスと見ていいのではないかと思います。

李登輝が、一時期、南進政策をやって、大陸への依存度を減らそうとしました。しかしそれは完全に失敗しました。現在、台湾から大陸への累積投資は、440億ドル、それが一方大陸の近代化につながっていますし、その大半は労働集約型の投資ですので、そこで得た利潤がまさに台湾自身のハイテクの発展にプラスになっているわけです。

もう1つ、貿易構造で見れば、明らかに台湾有利になっています。大陸から台湾への輸出は去年、30数億ドル、台湾から大陸への輸出は190億ドル以上です。ここ数年、台湾は毎年大陸から150億ドル以上の黒字を取っているわけです。もちろん、

中国側はわざとそのようなアンバランスを容認し、台湾経済を取り入れようとしているわけです。それによって台湾、大陸の関係は、今明らかに経済面で見て離れられないものになっています。今後、WTOの加盟などによって双方はもっといろいろな交流をし、相互依存の経済関係を作っていくだろうと予想されます。台湾の行方を見る上で、この経済的要素はやはり見なければなりません。

ただ、この要素が双方が極端な選択を防ぐ要素になるんですけれども、第2の要素、やはりそれぞれの内政状況で見れば、すぐ統一にもならないというのも事実だと思います。1つは双方の経済水準、生活水準の格差です。1人当たりのGDPで見れば大きな差があり、また政治面の差も歴然としています。中国大陸自身の政治改革は、2002年の次の党大会以降、もう避けられない状況になっていますので、中国自身の政治改革をさらに進めて行けば、台湾人の大陸を見る目も、もう少し変わってくるのではないかと思います。

それから、清末の光緒皇帝の選択が残した示唆ということ、ここで言いたいと思います。これはどういうことかといいますと、中国の政策決定を見るときに、それはただ理性的に、データに基づいて割り出せるものではなく、非理性的で、国内向けの考慮によって動かされる側面がある、ということです。中国の政策決定は、第一、外部の声を日本人ほど気にしない。日本人は自分のことに関しても世間でどう見られ、外国でどう見られるか非常に気にしますが、中国はその点で全く鈍感で自己中心的です。それよりは、国内の要素をもっと気にせざるを得ないからです。100年前の日清戦争のときのエピソードですけれども、当時、戦争や軍の実力を知らない人は、みんな日本との戦いを支持していたんです。このちっぽけな日本が、こんな理不尽なことをした。我々は絶対戦うべきだと。しかし、李鴻章など、北洋艦隊や軍を指揮する人は、みんな戦争に反対だった。そして、

皇帝も反対だったんです。だが、情勢がせっぱつまったとき最後に光緒皇帝は、「既にこういう状況になって、どうして私が戦争をやめると言えるだろうか。負けるということがわかっていても戦う以外にないんだ」と言いました。戦うと、領土を割譲させられ、賠償金を払うが、戦わないと、体制そのものが即崩壊、になるためです。このような発想は恐らく今日に至って残っていると思います。やはり、戦争をやれば中国は、当然国内でいろいろな犠牲を負う。しかし、台湾が独立など極端な選択をして、中国が何もしなければ、体制はその場で崩壊するというような、中国の情勢もありますので、こういう中国の特徴をもっと見る必要もあると思います。

では、今後どうなっていくのか。私は短期的に見て、双方の駆け引きがもっと続きますので、これからの半年、1年間が重要だと思います。その中で注目されるのは、1つは民進党の綱領が改正されるかどうか。今の陳水扁側は、7月以降、改正するかどうかを検討すると言っています。

2つ目に、中国側は、ある程度、台湾と妥協して、汪道涵を台湾に送り込めるかどうか。中国側の柔軟な姿勢、そして江沢民がどこまで国内を抑えられるかを占う上でも、それは重要です。

陳水扁の4年任期以内で見れば、私は結局は政治の交渉、統一の交渉に入るというのは難しいだろうと思います。双方が共通利益がある経済交流の方が先行するという可能性が最も大きい。ただ、双方がうまくいけば、江沢民もやはり自分の任期以内に、統一までいけなくても、とにかく統一に向けた交渉を始めるめどをつけたというような功績も取りたいので、ある程度の譲歩をし、双方は柔軟にその方向に行く可能性も20%ぐらいあるのではないかと予想しています。ただ、台湾の中で、陳水扁がどこまで大半の人の意見を代表して、思い切った行動をとれるか疑問も残ります。

一方江沢民指導部は、明らかに国内向けの政策

決定という特徴がある中で、本当に、台湾のことをもっと理解し、長期的な対応ができるのかどうか注目されます。この1～2年に不可測の要素はまだいくつも残っていますので、交流が停滞し、感情の対立が高まるという可能性も残っていると思います。

しかし、10年、15年で見れば、緩やかな統合に向かう可能性は、十分にあると思います。(1)双方の指導者の若返り化、考え方の柔軟化が予想されます、(2)中国社会自身の大幅な変革、いわゆる民主化が進むでしょう(3)中国の国力の増強、発展及び双方の経済相互依存の強化です。(4)アメリカ、日本を含め、結局、大陸と台湾が戦うということは、メリットがないということで、双方をもっと交渉の方に働きかけ、それが台湾と中国大陆がとる極端な動きを牽制することになります。

また、中国社会・文化の柔軟性・包容性も注目すべきでしょう。中国は中華人民共和国という枠の中での台湾の統合を鄧小平時代から否定されているのです。鄧小平は1988年、在米の中国人学者に対し、本当に統一となれば中華人民共和国という国名を変えていい、国旗、五星紅旗も変えていいと言っています。そのような話があるから、江沢民以下にとって一つの中国を柔軟に解釈できる根拠になったわけです。

台湾の将来を見るときに、台湾の民衆は何を選ぶか、それが最も重要であることは間違いありませんけれども、しかし、大陸の民意・反応を無視して、歴史的経緯と、国際的な反応を無視して、極端な独立ということには、やはりいけないでしょう。天文学的な例えをしますが、月だけ見れば、月は自分勝手に動いているように見えますが、しかし月の回りは結局地球との関係を切り離しては話になりません。では、地球は独自に動いているかということ、いや太陽とやはり関連して動いているんです。結局台湾の問題の研究も、台湾内部の一部の動き、あるいは台湾の大半の動きとして見

る場合でも、中国大陆の民衆の考えなどを合わせて見なければならぬのではないかと思います。

最後になりますが、中国の台湾政策の行方に対して日本はどう対応すればいいのか。私は現在、日本は「一つの中国」を堅持し、同時平和解決を求めると、これはぎりぎりでも妥当な線ではないかと思います。

アメリカは台湾に対して、もっといろいろ言っています。しかし言っている前提の1つは、クリントン政権が、3つのNOをはっきり言っているからです。正式な国家が加盟するいかなる国際組織への台湾の加盟も支持しない。台湾の独立を支持しないことなどを表明しています。表明していながら同時に、武力は絶対反対だと言えらるわけですが、日本は一種の逃げの姿勢です。中国は日本に対して、3つのNOを言え、迫っているんですけども、日本はそれを言わないわけです。それによって台湾問題をこうしろあしろという立場を自ら制限しているのです。ですから、アメリカの戦略の陰に隠れて対応しているのではなく、本当に日本がもっと役割を果たそうとすれば、それは、やはり台湾の地位を含め、一つの中国、台湾の国連加盟などについて、もっとはっきり表明せざるを得ないというところでセットで考える必要があると思います。

李登輝の訪日の問題ですが、いずれ遅かれ早かれすると思いますけれども、やはりそこは慎重にすべきでしょう。結局、中国人は、あなたが中国のことに悪意がないと思えば、どんなに中国に厳しいことを言ってもかまわない、なるほどと聞き入れる。あなたが中国のことを悪いと決めつければ、あとでどんなに歩みよった話をしても、この人は下心をもっていると思われる、こういう感情的な対応があるのです。李登輝に対してまさにそうです。

上海の近くの杭州に1つ大きいお寺があって、1000年前の岳飛という南宋時代の英雄の像があっ

て、その庭に当時の裏切り者の秦檜の像がひざまずいて置いてあります。千年経っても、毎日ツバを吐かれています。李登輝は離任したばかりの総統で影響力がまだ残っており、しかも中国を今でも攻撃し続けています。従って彼の訪日問題はもう少し鎮静化を待って、朱鎔基は恐らく10月に訪日するんですけれども、その後に日中双方が話し合い、来年春以降なら問題は小さくなるのではないかと思います。

最後ですけれども、中国を見る上で、中国的な思考法をもっと理解する必要があることです。第1に、台湾人意識というものがよく言われますが、結局、それは中国文化の一種の独自の地域文化意識です。中国人はほとんど自分は上海人、広東人、四川人としか思わないんです。海外に来て初めて自分は中国人であるという意識がもっと強くなるんですが、したがって台湾人意識という言葉だけで、イコール中国から離れていくということにならない点です。

第2に、冒頭で言いましたけれども、駆け引きが激しい、その発言を割り引いて見る必要があることです。今後もいろいろと揺れがあると予想されますが、台湾民衆を含めた中国人はみな、極端な選択が嫌いです。激しい駆け引きは実は慎重にその枠内で行われている点を見極める必要があります。国民党政権が長く続いた時、それに対して独立を求めるエネルギーが結集されましたが、しかし、今、その虚構を崩して現実に戻ると、今度台湾の民衆は将来の自分の位置づけをもっと考えなければなりません。この将来の位置づけを考える上で、大陸と無関係でやるということは到底できない。そういう意味で、独立という動きは今後弱まっていくと予想されます。勿論、統一に対する視線も厳しくなっていきます。その意味で、統一に向かうとしても結局双方が「一つの中国」という、透明に近いような緩やかな一つ屋根の中で合意されることでしょう。台湾は今のような独自

にやっていく中で、中国大陆と妥協点、合意点を見つけるということは不可能ではないのではないかと思います。時間を大幅にオーバーして申しわけありません。御清聴ありがとうございました。